

アメリカでの学びと実践を通じた看護

倉本 留美

(東京女子医科大学大学院看護学研究科博士後期課程)

1960年代にナースプラクティショナー(以下、NP)が出現してから50年以上が経過しようとしている。今やアメリカのNP人口は急激に増加し、医療現場において重要な役割を果たしている。世界第二次大戦後のベビーブーム世代の老年化、肥満などの生活習慣病の増加、オバマケアに伴うプライマリーケアの需要の増加により、NPの役割はますます必要とされてきている。日本においても同様、2025年問題にむけてプライマリーケアプロバイダーの需要は激増していくと予想される。

以前、アメリカにおいても医師たちはNPに患者本位の診療を許せば医療の質と安全の低下につながると懸念していた。それは、その教育の期間の短さなどにあるようだ。しかし、様々な研究論文などにより、NPによる診断・治療は、患者からの満足度をはじめ入院日数の短縮、再入院率の減少、そして血糖値の安定など様々な効果が実証され、医師とNPとの間に医療の質に違いがないことが証明されてきた経緯がある。ある研究では、むしろNPのみで処方を含む診療行為がさらに良い診療の成果に繋がることが実証された。このように今やアメリカ社会では、ヘルスケアプロバイダーとして確固たる認識がされている。

医療現場において、NPは患者中心の医療の提供を得意とする自身の特色を生かしながら、医師とチームメンバーとしてのコラボレーションを図って行く役割を期待される。それにより医療コストを抑え、さらに質の高い医療を提供することが重要であると考えられる。これらの役割を遂行するためには、自身がサイエンスとしての継続的な看護教育、卓越したコミュニケーションスキルなどをさらに深く学び、プロフェッショナルとしての自信を身につけることが大切であると実感した。

今回は、私がアメリカハワイ州ハワイパシフィック大学看護学部と大学院でファミリーナースプラクティショナーになるまでの過程、アメリカにおける看護教育やNPの活動の現状について紹介をする。そのうえで、実際に受けた看護教育やNPとして実践してきた診療行為の体験から実感した日本の文化と看護との相違点などについて考えたことを報告する。さらに、アメリカのNPの活動や教育の軌跡も参考に、今後の日本におけるの看護師やナースプラクティショナーの役割について提案したい。
